

巻 頭 言

Editorial

京都に来たお客さんたち

Visitors to Kyoto from Abroad

日本支部長 佐々木 徹

Toru SASAKI, President of the Japan Branch

昨年十月、国際ディケンズ・フェロウシップ会長のジェニー・ハートリー教授が京都にやってきた。銀閣寺から哲学の道を経て清水寺に至る観光ガイドをして、お返しに関西のディケンジアンを対象に彼女が編集したディケンズの書簡集についての講演をしてもらった。どの手紙を選び、どの手紙をはずすかの基準が主たる話題。編者の特権で自分が住んでいるリッチモンドが出てくる手紙を入れたという話がおもしろかった。2013年冬季号の「ディケンジアン」に載っている写真から想像されるとおりの気さくな好人物だった。

今年の四月にはケンブリッジ支部の支部長クリスティン・コートン博士が来京。夫が東京で講演するので日本に来たという。夫婦で京都に十一時着、五時発というあわただしいスケジュールであった。銀閣寺を見て哲学の道の途中までガイド。剣橋支部は苦心してやっと出来たばかりなのだが、大学教員の援助がまったく得られないと彼女はこぼしていた。天下のケンブリッジにディケンズを愛する教員がいないとは！

このコートン博士の御夫君が『歴史学の弁護』で名高いリチャード・エヴァンズ教授だとわかった時はびっくりした。ちょうど彼がA. N. ウィルソンの『ヒトラー伝』をほろくそにやっつけた書評を楽しく読んだところだったので、スピルバーグの「シンドラのリスト」の話をしたら、案の定、しっかりした答えが返ってきた。あれは事実を不必要にセンチメンタルにしているところがいかにとおっしゃる。たしかにその通り。エンタテイナーとしてのスピルバーグは盛り上がるセンチになってしまう。しかし、そういうところが、彼が現代版ディケンズたる所以なのだ。

昨年の「巻頭言」でドストエフスキーとディケンズについて書いた。それが呼

び水になったか、なんとも妙なめぐり合わせで、僕が取り上げた TLS の記事を著したエリック・ナイマン教授が四月に京都大学を訪れた。記事が出たあと、件の贋作者からメールが来て、ありがとうとお礼を言われたらしい。それに、ナイマン教授が暴いてない匿名寄稿がほかにもまだあると自慢していたとのこと。わけのわからんやっちゃ。